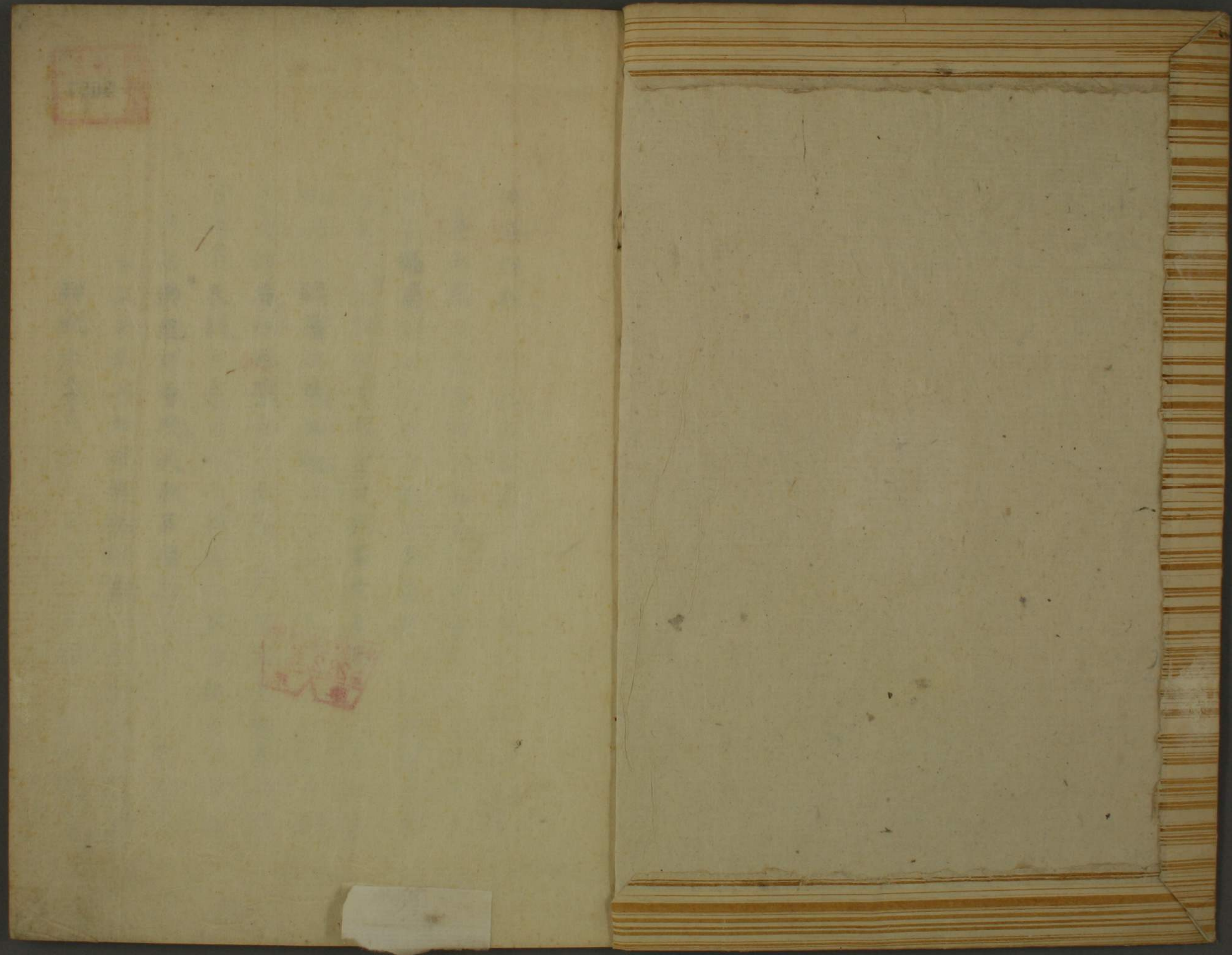


日本紀行

第六卷

ル 2
3097
1





門 2
號 3097
卷 1



日本行紀

第五篇

錫蘭

工是の¹三ントテカ止口到着する事
錫蘭の引水キキ子ノ子艇
府の外景
月夜服
佛陀の寺院及び其僧
シンカレスの書記の様
神蛇の事

早稲田大学図書
26.2.5
茶

暹羅の弓徒及び法徒

千八百五十三年三月十八日 印度の多嶋
海中麻刺加の海峡にて記す

第三月十日日暮に於て錫蘭の南尖あるポイント
デ、ガルレの光明燈を瞻望しけり但其濱岸の危
嶮ありを以て此夜ハ船を風に向て轉廻し翌朝
に至りて港口に入りて決したり○予等尚
不濱岸を距ること英法四十里ある處にありり
るに夜半の頃已に引水艇一隻ありて船に來れ
り○其艇ハ慣れざる者これを見るときハ殆ん

とこれに乗りて海に浮かぶことを思はざる者あり○所謂艇ハ樹幹を刳空せる者にして幅僅に
十五寸より十八寸に至る其兩側ハ舷に代へて
一隻の木板を打着し以て波浪の踏入を防
ぐ兩板の中間なる空處ハ廣さ僅に十二寸に過
き以故に此間を坐する者ハ兩脚を交叉し窟隘
を思ふに非されハ能ハば否されハ艇を兩脚間
に致して脚を水中に浸する要以へし○其傾覆
を防ぐの策亦簡易にして且試験を奉つる者
り即ち長さ六尺乃至八尺の細き材を艇の前後

両端は直角に打着し此材の両端は更に大きき
六寸より八寸の長き材を艇に平行して打着せ
り此材は水に沈むことを得ず又水を離るゝと
ことを得ず以て其艇として安全無危殆人と巧思
造構せる哨艇と一般ありしむ○後日予亦屢々
此艇を借りて遊獵及び其他の上陸を行ひり
り甚々安全あるを羨えり○後日錫蘭を去り
りる日此の如き制作ある漢艇を海上六七十里
あり処あり屢々見たり
セント、テカルレの港口ハ其景色驚異するに堪

へたり○其府ハ狹き半島上ニ在りて府の後ニ
安全あり湊あり○港口ハ堡壁頗る堅固に建創
し家居ハ半ハ和蘭の旧式ニ造築し半ハ印度風
の造作にて林樹の際ニ隱顯し光景頗快美あり
○海岸ハハ岩石散布し波濤此に碎け自餘の部
ハ無数の椰樹生長し樹頭ハ彼此に低き青色
の草と現し或ハ佛尊寺院の白色なる尖形臺を
聳やせ○港内ハハ大小谷色の舶散布し或ハ貨
を載せる取勤め或ハ貨を卸すと務む其間又無
数の小艇ありて来往す其状宛水見戯の紙舟を

涌水は浮へたるに似たり○此小艇ハ多くハミ
カ鉄を用ふる事なくして造れるものにして其
諸部皆接合するにハ或ハ木栓を用ひ或ハ椰子
の殻の織状質にて結りたる繩の一種を用ふ○
予ハ船碇を下岸を待て以て此種の小艇幾多あり
て船の周圍に聚りたり○土民此艇に在る者ハ
大都祇半身を裸呈し未完ある英語を以て予等
の殆つきたる衣帛を濯むむことを乞ひ且ツ右
に自其正直無比あるを誇稱して又新貨物ハ旧
貨物の廢漬せる者を出して賣らむことを求め

る○嘗て此民衆を許して船に上らしめけり
ハミカ船中の諸室に入り或ハ十月前此に在り
ける「フレカッ」船蘇士貢罕那船中の予等ハ同伴
の證書を出し示せるもありり○土人の中ハ
ニイルと曰へる者ハ殊に正直ある者にして実
にこれに稱讚するに堪へたり故に予ハ此男子
命じて予ハ衣帛を洗淨せしめたり○衣帛洗淨
の事畢りて後予ハ衣裳を整へ府内を遊觀し且
ッ予々本國へ送るべき書牘を郵丁に托したり
此地より最先に奇とすべきハ男子の服飾あり

即其腰圍は大なる子エテル布東印度産の類を纏
着し其端を長く垂れて踝に至らしむること婦
人の外套の如し上部半身は太抵裸体あり但稍
富める者の衣襦を着し短き筒袖を穿ちたり○
其長き頭髮は後頭上より編みて一塊とあせり
これ固りて殊に婦人の態に類せり五歳乃至
八歳の少年は此服に固りて殊に愛すべく見え
たり而してその容顏溫柔文愛あるを頭髮の長
くして黒くかつ鬢縮せるとして全く美娘子の
態をなせり○府内を周覽せし其市街は太都

ぬ一様の建制にして家居及び勝地の記するは
乏る者絶つてあり○但其堡壘は甚古り或は敗
潰せるもありて頗る奇觀を呈せり○
予は尚も其郊野の景色を覽んことを欲しこれ
七十一日の味爽に再び路を登り東方の濱岸を
探らん欲したり○予は砂多き濱岸を行歩せ
し頃朝日方し椰樹の後を昇り北日ハ前夜の
大雨よて大氣蒸露を含み海の音は望みてハ其
際見えしことを得たり○印度人の家屋より
昇騰する所の淡青なる烟椰樹の森林より高く

ちて其上に浮へる所の霧は合せり○烟霧の中
より朝日の輾り出つるう恰も灼爍せる黯紅色
の一大弾丸の如く且濱岸は手遠よして砂石多
かりり此ハ波浪の岸を拍ちて退く毎に湿へる
砂石日光は照射して紫色の線紋を現しり○
濱岸の直前ハ赭色ある裸体の土人其艇を水
に下りて動作し稍遠き処ハ彼の異様の小艇
数艘ありて帆走せり○此時の景色ハ予々今日
みて遭遇せる中子就て濃極淡抹最畫図の趣成
成せり而して惜しむべきハ予々晝吳を船に残

きた此ハ唯其邊角を写せるのをよして色彩ハ
考めてこれと予々の記憶を托せるを免れざる
在りりる○
予々便匠「ハッ」常日搬送すを擔ひたる一人の
水夫を率じて尚進行すること少許よして泥濘
ある稻田に達したり○此日ハ鳥を獵せむと欲
して出て此ハ唯邊角を寫するに足るべき
要件の事を携へ更予々双響銃と霰丸匣と杖
携へたり○稻田に於ては果して鷓の二三種を
得更ハ鷺及び鶴の小ある者も予々未だ知

らざる所の者二三を得たり○予若し良き狗を
伴ひたらむは獲る所尚不許多あるべし但し
一二の裸少年ありて大に予を獵を助きたる即
或ハ鷓鴣を驅り出たり或ハ射たる鳥を泥水より
引き奉りたり此輩ハ殊に喜ひて此泥濘中より出
没せり○日光正に赫耀せる頃予ハ蔭多き一阜
の涼地より息ひ得る所の鳥皮を剥皮せり是炎熱
ある天氣の爲に剥皮の術を久し遅延せしめり
さるを以てある○皮を剥き了りて後予の淡蕩
ある朝餐を用ひたり即ち彼船用乾蘆錦と醃肉

との二品ありき此地の水ハ飲料に適せず故に
少壯の錫蘭人々木よき取りて送れる所の椰子
殻を用ひたり○此日の炎熱あると予々渴せると
子因ゆるり此椰子の味ひの快美あること他の
諸飲料を用ひて未だ嘗て覚えざる所あり
此地の近傍に佛陀の一寺あり○予此寺に住せ
る僧と語ると歎せし予に予の銃と獵刀と
を残し行かんことを請ひしれハ便ち其請に隨
ひて行きたり○其寺ハ一阜上より在りて小なる
ハ稜の堂あり其周に凡高さ四尺許ある牆あり

環繞せし○其側より稍低く前庭の一種ありまた
墻を以て圍繞せり而して小なる階を設け此に
登るへりくまむ○其最内堂の門の側より左より壁
隙を設けしある燈を照し右より別より欄圍せる
神井あり井の前より一個の神臺を置たり○此
処より八前庭より一二級の階を経て出づること
或得べく最内堂を通過するを要せん又前庭より
第二階あり此を經れば僧の住樓より達ん
其最内堂より八稜よりして四個の戸あり戸口よりハ
細き柱ありて柱上より横材を掲けたり此堂上より

堅固なる幔壁を設けて其上より尖形臺を築き其
尖頭よりハ鉄の飾臂を造り小なる鐘數個を此より
懸たり○凡そ佛陀の寺院よりハ皆此般の尖形臺
を置きたり但し或は此寺の如く直ちより寺上より
築き或は本寺の傍より別より築成するを異りし
而して其内よりハ通常よりハこの宗法中興の祖の
像を置き或は至尊神の神とせる佛陀の像を置
きたり○其最内堂の中よりハ四处の戸口より對し
て佛陀の像四個を置き更より尊者の像數個を属
せり而して各像の前より小なる神臺を置き諸種の

供物を此に積みたり大抵花種子柳樹の花等あり或ハ小なる銅錢數個を置けるもあり此八稜の堂の内面ハ神子供する諸種の畫圖を写せり中子就て白色の象或尊敬奉の表をかすし見えたり○又背教の徒僧侶及び信女を前ふて殺し槍よて殺し或ハ創よて殺し又ハ鋸截し若しハ焚火する等諸種の残毒の兇暴を行の状と寫せるもあり○其兇徒の魁として屢冠を戴ける君長の状を寫せり此君長の後子天罰を受くるの状を別所子圖せり其状ハ兇君方子死

し瀕するに當つて紅焰其頭を繞ひて是れ地獄の池に投下す其池中ハ已に他の兇暴ある君長の冠を戴ける者ありて白色ある鬼の大牙ある者ありて焔られ或ハ自餘の痛苦を受くる状と摸せり一人の老僧鬚髮共子剃り去れるり黥黒色ある長き木綿布を纏ひて出て来り予々為し懇勤し諸圖を開示せり予これ少許の錢を興へ謝しこれハ固辭して受けず但予子佛像の前ある神臺を指示しけり予固りて其錢を神臺中子投し

け之を僧厚く拜謝し花及び果实を予に贈りた
る○此地の光景ハ椰樹の中ニ小寺を現出し印
度人の居家其近傍ニ散在し土人彼此ニ群集し
て頗る写すへきニ堪へたり但し其他ハ別ニ奇
景あり

日已し暮れり此も予火を打し予の晚餐を食し
一椀の哥^ゴ喜^キを飲み椀^{タン}葛^カを吹きて地上ニ即し安
眠して翌朝ニ至りり

翌日及び其翌も鳥を獵りて稻田の泥沼を行走
去或ハ樹間ニ息ひて鳥皮を剥し或ハ風景描写

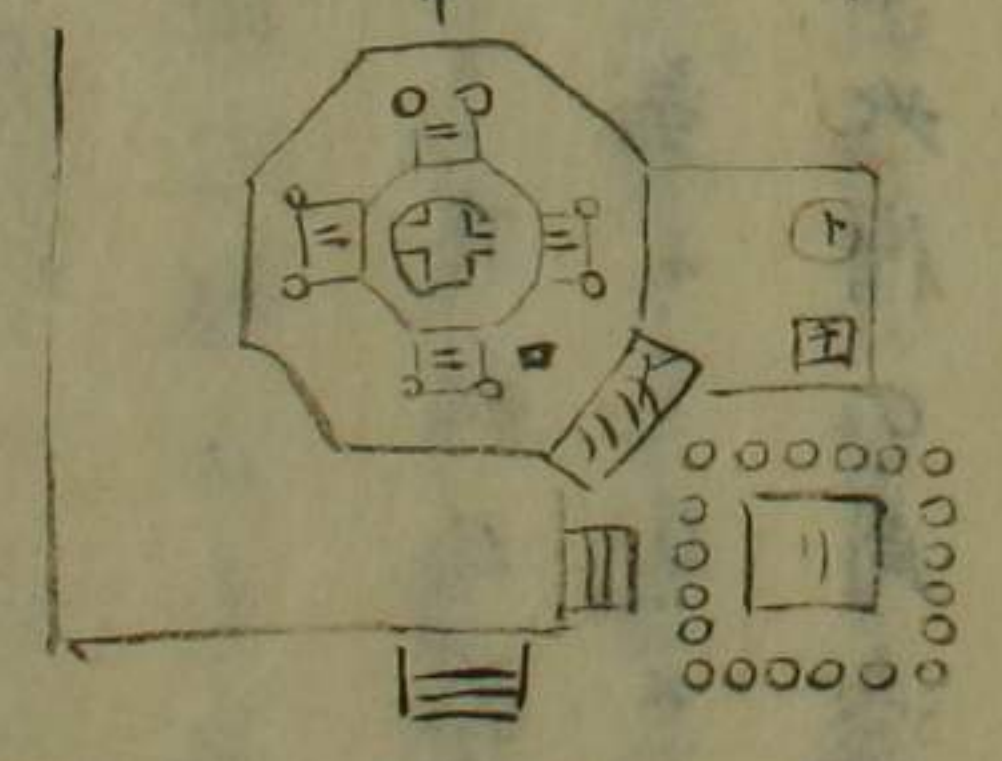
す寺にて消遣せり

第三日午時の頃ニ於て予他の一小院ニ到着せ
り此寺ハ上ニ記せる寺と異しして全く平地上
ニ築き八稜あらすして齊方形あり○神像ハ三
処ニ安置せり即ち正中ニハ佛の像を置き前の
寺ある佛像より大にして彫彩せる裝飾を施
せり其右及左ニ長き外套を着し剣を抜き持て
る像あり但其姿態善良あり○寺の内面ニ圖畫
を施せるハ猶前日の寺のこと○上ニ記せる
如き尖形臺ハ此寺にてハ別處ニ築きたり但し

尚不寺の境内におあるあり○本寺の傍に柱廊ありて本寺は通し長六十尺あり七十尺の家居あり四個の犬ある戸ありてこれに入りて一屋内にお廣き廳ありて廳中にお方形の格子ありて遮隔せし講説場あり○此廳ハ神を敬奉する為の正廳あること疑ひあり其僧徒の住処ハ別にお離れあり亦柱廊を以て圍繞せし○寺の前にお高き柳樹あり其下にお一井ありて井の傍にお漫染せる水槽あり柳樹の皮を以てこの水を酌むべく設けり今此は二寺の縮模を載せり

甲 第一等

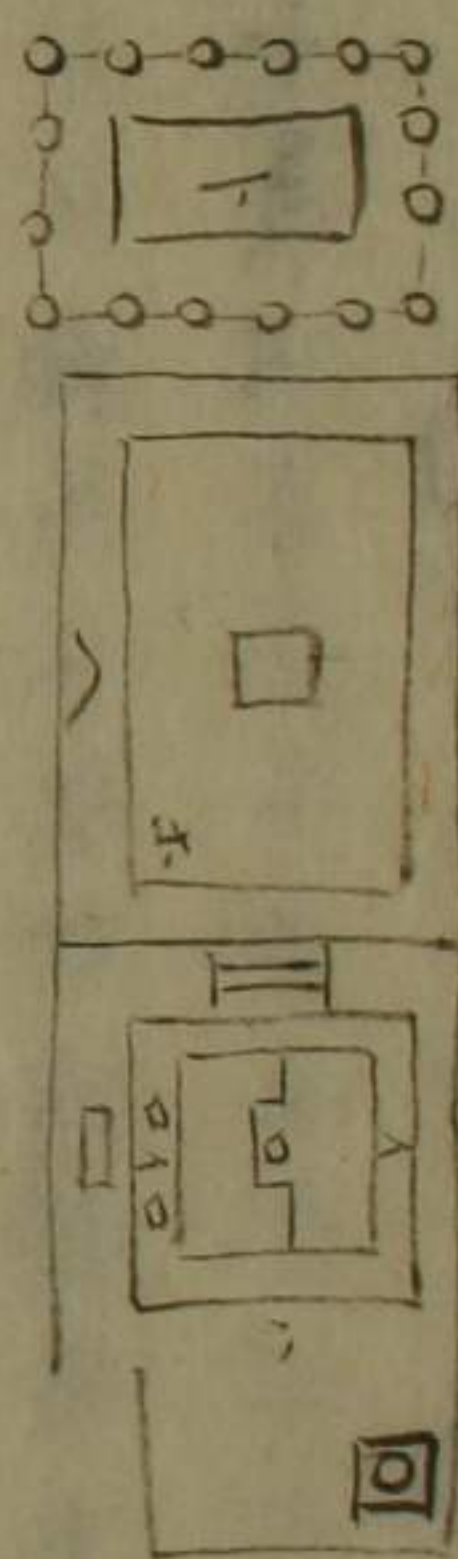
- イ 外庭
- ロ 八稜の堂
- ハ 神の所在
- ニ 井
- ヒ 僧院
- ヘ 寺の内庭
- ホ 堂の門口
- コ 属庭
- カ 神臺



乙 第二等

- イ 寺院
- ロ 尖形鐘臺
- ハ 神の所在
- ニ 講臺ある廳
- ヒ 属庭
- コ 其前庭

① 僧徒の住院



其柱の正前に一僧ありて坐せり其緋の淡黄色の衣を以て察するに蓋一扉一寺ありて見ゆる僧よりも貴き官ある者あるへ此僧の周邊に離僧及び他の少年圍繞し僧の石の葉より椰葉上二字を書きたるを教えたり其様人を以て上古の

俗を想像せしむ○尖銳ある石葉を以て字を葉上より造りて後一種の油を葉に塗りてこれを火の上より乾らすこと此より固りて字黒色となる○每葉に二孔を穿ちこれを糸で繋ぎて書冊とす○其家ハ甚異様あり然るに亦善く書ける者ハ白色椰葉上より斑然として頗る妙あり凡そ左の如し

*In 1799 found in the library
of the University of Leiden*

其言記する際石筆を用ふる法甚異様にして其
柄を前より出たり其尖を己れの方より向す運用を
予其石筆及び書写せる柳葉一二枚を得むこと
を欲して請ひりれハ老僧輒ちこそをゆるしと
へたり然るもゆるれりためし錢をあたへむと
欲するは例のことく辞して受けさりり返さず
よよこれを神前の供盆の中より投したり○佛陀
の經文及び「シンカレ」の語法の書をも一見
せしむるこそを得むことと乞ひりるを謝して
許さざりりハ予もよよこれを治ゆることとあ

あまー
此日ハ己より晚より向ひりれハ予ハ疾歩して海岸
の方より向ひたり是予の暇期此日の日入より止ま
る候以てあり○帰途より於て椰樹の叢中より美ま
る斑紋ある蛇の長五六尺あるを見たり予此美
紋皮候欲しりれハ己よりこれを銃射せむと欲し
りるは伴ひりる一二の印度人急よこそを防止
し其中より自ら銃口より立ててこれを防くものあ
るたりし蓋し其教法より管りたる縁由あるもの
と見えたり○予ハこそを為し予の採集中の一

奇品を嗣きたれハ頗遺憾ありトハ彼の印度人
等自餘の諸事ハ於テハ甚々予ヲ為シ懇篤あり
けきハ此一事を以テ彼等を怒らむ事欲
せず遂ハ此地ハ近つき見ることを得たりト
る予の異とするハ此三日の間婦人を見ること
甚稀ありトあり即ち予ヲ指を屈くる所五人の
之其中三人ハ年老たる婆子ト二人ハ少婦子
ありりる○蓋此上の習俗ハ婦人ハ家を出
ること稀ありト見へた是而して予ハ家居中
を窺ひ得しハ唯一間の之況や草卒ト此を窺ふ

を得しのみあるとや○但し曾て聞はるゝ如く
此地ハ女子男子ト此中ハ甚稀トハ男子六人
と生む中女一人を生む如ト云へるも果
て然るや未ト知るへらりや○
予ハ海濱より彼の異様の小艇ヲ乘りて予等々
「レガット」ト帰リル時一日未だ暮さるの前
に
船上トハ諸種の未客ありて甚喧噪セリ○英吉
利の將士及び英吉利の姉妹等樂を奏する儀聞
くとして半甲板上ト聚會セリ其地船の諸部ハ貴

賤の土人よて充塞セリ其中よハ象牙或ハ象の
願骨を賣りむとて持ち来りるカあり或ハ玉又
ハ小艇の縮模を持ちて賣らむことを乞へる
あり○其價を問へハ其貧らさる如く雖尚
不直しく誣固せらるることなき戒むへし最
良の策ハ褻衣或ハ布帛の類を以てこれヲ換ふ
るよ在り土人甚これを珍賞セリ○予ハ喜望峰
よて忽天突馬の婦人ヲ製させたる儒衫一二領
と更ニ少許の衣什を以て巧紋ある小艇の縮模
一對捲藁一匣象の願骨一個を得たり○此ヲ還

羅の軍艦よて法教の徒の多く来着せる者あり
り此是と錫蘭の首府カシヤイハ佛の函を藏貯
せるを以て此法徒の詣拜する地ある故あり
○法徒の中よハ僧亦頗る多く中よ就て二人の
貴官の僧予等ハ船ヲ来りル予其一人ハ此日
請ひ得たる所の椰葉を出し示し且これを誦せ
むことを乞ひりれは彼僧乃ち予ハ鼻聲よてこ
を吟し而して後未完の英語よて此呪ハ危険
ある旅行をあす人の誦すへき者ありと説りり
○船上の客次第に散り夕砲の声夷きりる後予

ハ神身共ニ疲乏ニ此モ予リ巾蓐ツクヲ入テ安眠一
以テ疲倦ヲ養ヒハリ○翌朝予頗ル晏ク起き
タルニ船已ニ動きハレハト是ニ因リテ再海中
ニ出タルヲ知セリ○予船上ニ出テ一回顧一け
レハ錫蘭ハ已ニ一髪ノ青ありりり而一テ予
寫シ来レリ諸國ト予リ鳥皮ト泥汚セリ衣ト更
ニ予リ疲倦ト故以テ回想モ此モ錫蘭上ニ在リ
リルコト已ニ四日ありり○此四日ノ如ク予
テ絶ヘキ旅行ニハ予リ新約基キニ帰着セハ
頃ハ殆ハ疲倦ヲ極ムヘ一豈唯世界一周ヲ夢

見多るることくあらむや

日本行紀

第六篇

新嘉坡

港口に到着する事

此地の繁盛漸く増す事

府を見る事

シバパイ人

兵營の事

杉板船

島間を渡す事

漁村

フウロオ、バッセ

磁蜜

葵地

胡椒園及び薑蒜園

支那より移せる殖民

漁家より食する事

香港に到着す事

千八百五十三年第四月八日支那海上船上

日本筆と採る

滿刺加の海峡を南東に向ひて進みけるに隨て
 漸く狹隘となり後ハ一方ハ常ニ海岸を望
 ミ地の一方向ハ常ニ教小島を見るに至れり○
 第三月二十五日の朝に至て英吉利のフレカッ
 ト船一艘水蒸船に引かれ來れるを見たり○此
 フレカット船常式の脱放を行ひて是を予等の船
 亦亦是に答へりり爾後英吉利船ハ予等の船の
 後ろに廻走せり予の船の樂師等ゴットサア、テ、
 クエンレ夫當ナ此君主に福の曲を奏しあり○久
 しらく引く引水機船に着し予等の中の教人

子書牘を過すにあり其書以得多る人の甚歡
喜せるに引きかへて予々如き音信を得ざる輩
比無聊なるを免きさりける○此日の夕に於て
予等新嘉坡の港に入り多り港内は船充滿せり
殊に多くハ支那の船ありき但西米利加の船亦
一隻ありりり○一日前予等又西米利加の「キリッ
ヘルス」船の一種の船七隻を見たり
新嘉坡ハ拔太斯亜を遷せる代りとして千八百
十九年より以來英吉利の殖民地と定まりしを
固りて東印度中に於て和蘭人等の威力を回

復すへき旨趣ありりり是より先き已に盛旺
せる一地なり但し土人の争闘興りしより一
時衰廢し千八百十九年英吉利の領地となせし
頃ハ住民僅に百五十人し超えざりける○「スタ
ムホルド、テップレス」英吉利の人の名の記に據れし其目今
の府を建築せる頃ハ尚不舊時の痕蹟多かりし
と見えり○新建の殖民繁盛となすは其勢
速しして自由の港租税無の地の便利なるを為めし
諸方より高賈及び移居の民大に集まり久ら
りして一個盛大の高地となり目今ハ殆んどこ

是を東印度の噴画と稱をへきよ至是り○此處
より予始め支那船を見より高く水上に起立
せる異形の船と稱をへし但し其詳記ハ香港記
の篇に譲りて此より其詳載せざるなり○羊小
時を経ざるより予等の船の周辺に無数の小艇聚
まり是或ハ船上の人の汚きたる衣付を洗はん
り為り或ハ交易を行はんとして船に蟻附して大
声叫喚する者なりき但一二桶の海水より彼等
皆散歸せり○此民衆ハ或ハ滿刺加人あり然も
とも多くハ轉を刺する卑賤の支那人なりき○

日未だ暮れざりしに是を予ハ急き上陸して府内
を徘徊しけるり半英半唐の醜陋なる家店に俗
人充滿し其貨を售らんふて或亦喧嘩し
買てんふりと乞へる態一々快意のありたり
○支那人の態支那の家店及び其風習ハ廣東
より上りて後尚も詳悉し其本色を見るよりと得
へきを以て此より畧して載せり○但此より住
る支那人ハ多く舟工或ハ擔夫より是等の役
を命せむより甚多適應せしものなるへし○歐
羅巴人の市街ハ皆最好の建築より多くハ園

庭を具へ多る壯美村莊ありり其兵營ハ猶錫
藁子於ける如く半ハ英吉利人より成り半ハ
「ハアイ」人より成り○其柱屏を以て圍繞し
其後子第懸せる席より造れる一列ハ小席あり
「ハアイ」人ハ半裸体子しし全裸体なる各個
の家春と共ハ此内子住持せり蓋し当没子存る
者の外ハ直ち子其煩擾なる股を脱する以て
常習しけ○又此子一夥の火器隊を置き多り其
同齊なる股と棍棒と以て直ち子これを知り
易し但し皆主人を以て編制せり○又此子好き

建築せる改羅巴風の旅館ありり但其枕貸ハ
甚多貴し○又此子一夥の火器隊を置き多り其
予ら船子備へて總督已予ら為し一艇と一
導と故催ひ予ら三日の暇を賜ひし海岸子遊行
する以許せしハ喜ひし境へさる事なりき○此
小艇ハ板板と名つけて頗る軽捷なる者子し
て凡長二十五尺尖鋭なる形子造建し其中央ハ
稍廣く徹風子善航走ハ其楫工四人共子舳子
坐し更子一人ありし舵を管せり○其中央最廣
の処ハ席を以て蓋しし兩三人を坐せしり且ツ

眠らしむるも足る又舢舨後ハ煮烹の器具を備へ夜ハ別種の席蓋を用ひし全舢舨を掩覆せり○舢舨中ハ多少許の米茶乾蒸餅等を載せ更ハ一壺の水を翌朝より遊観を始めあり其通行せる處ハ無数の小島の中間ハして其島ハ大抵滿刺如の漢民住棲せる所なる○諸處ハ於て嫩條及竹より造れる大なる船ヤと見たり其製或ハ進潮の時ハ退潮の時ハ莫此中ハ入るへき者なり○又彼此ハ漢人の船を馳るを見たり其手法極めて捷快なり○又一舢舨ハ「ア」と「エ」を

賣りける支那人より此最美の菓を買ひける六セント銅錢の銅錢の名ハ十二枚を得たり藏野ハ三六日美食とありあり又夕ハ至り六セントと以下活潑の一海魚を買ひ得たり以て七人の為ハ一夕餐と一朝食ハ供するも足りぬ又一二の島上ハ甚多廣き野ありて本國の穀田及び馬鈴薯圃ハ稍類セリ而して皆「ア」ハ「エ」を培殖せり是近日の發明ハて斯く培養せる者ハ野生の者より大なりて且甘美なるあり故試定せるも因る○其原居ハ多クハ近く水濱ハ

築造し潮汐の面時を便し且つ猛獸を避くるを
爲し高さ十尺より十二尺なる柱上を造れり
○此家上登る多免の様子ハ夜間ハよきを引き
去るあり

第一夕は予り宿せる地ハ滿刺加峽の口なる小
島づう口ハせとりへる者なり此邊ハ島と陸地
との間ある溝渠處ハ小橋ハ僅ハ英國法の半里
ハ満ちされハ夜間ハ陸地より虎来るありあり
て殊ハ新月の時ハ多ト云ふ○予ハ此般の歎
を以て其夜の過を償ハちむるあり哉好

ふ道は此夜の善く察視しける月ハ明く月
下ハ書や讀むへきなりなるハ途ハ一個を見さ
りけるハ遺憾と謂ふへハ殊ハ数日前此より一
里許なる一漁村ハ虎来りハ一老婆を撲殺ハ救
援ハ来り多る二三の男丁を傷ハて後遂ハ婆屍
を啣ミ去れりハ聞けハ此夜虎を見さりハ遺
憾最も甚ハ○是より頗る遠く島の内地ハ入り
りハ河ありハ河ハ谷つハ此河ハ潮
りハむハ欲ハけれハ夜の本多明けさるハ已ハ船
と出さハめたり○予ハ稱工の告けるハ此河濱

よハ鵠甚多き處ありと云ふは子園にて艇を其
處に任めて夜の明くるを待ちあり○天明に至
りく果して鵠數隻を打ち得たり其形本國の鵠
よりも小あはれと云ふ其肉ハ味甚美にしてあはれ
固りく佳餐と云ふあり○彼此の濱岸より野猪
の跡を見けるは蓋し甚大なる者ありと云ふ○但
此地ハ竹高く茂生し泥濘黒くして粘り多し屢々
泥中を膝を没するに至りけしは野猪を獵する
の念ハ絶ちたる○滿刺加の楫工ハ縦ひ僱費を
厚償するも此菽澤中に入る事欲せざる其虎を

畏るゝと云ふ甚しき子園となり蓋し一ハ虎の
甚多黒人の肉を好むと云ふ又一ハ菽沃ハ猛
獸に遭遇して甚多不利なる處ありと云ふあり
り其故ハ脩作ハ泥濘と云ふ固りて進退甚だ難く
火器の使用亦極めて不便なる故以てなり
予更し上流より下るるに家居多き一村に達し
り其様殆んど海岸なる民居に類せり○此村に
てハ磁壺ラロキを造る其法水ウヰの如し○始め一層の木
材上を壺を並置し此上を又木材を置き再び壺
を置き次第に數層となり其最上層の木材上を

一層の粘土を蓋ひ一孔を残し火を導く子供
を又材の隙間に粘土を以て埋り塞くものと焼
炭竈の通法の如く以て其壺ハ半黒半赭にして
甚多よく焼くるなり然れども其形状ハ一風
韻あるものなり

此村の近傍に墓地あり其最大なる貴冑の
墓ハ巧に彫鏤せる木櫛を環繞せり其他の墓
ハ唯木造の圓錐を以て碑子代むるものハ婦人
の墓ハ其圓錐の頭を截り扁平なる男子
の墓ハ圓錐の上を彫成せる小球を附けり

〇一二の圓錐上ハ更ニ白色なる木綿布を纏
着せる者あり蓋ハ此土民の奉神の事ヲ管する一
ニの縁故ヲ由てるなるハ予亦此を推問しけ
るも明亮なる應答を得ざりしを以て此ハ其由を
確説する事を得ず但予々言彼等ハ通せざりし
り或ハ予り問ふ答ふるを好まざりし亦遂ニ
知るへららば〇予再び虎ノ遭むるを何處の
處ニ最善きりと問ひり返して尚不上流ニ流るへ
しと答へ且ツ一個の土人先導をなさんと乞ひ
たり〇此時ハ満朝なりしを尚不上流ニ流る

ふく凡そ五里許なるふく城得あり此處よて小
ある湖の一種とありて河ハ尽き多り○是より
ハ楫工復々進まさりり進むハ願銃を肩に擔
上し予々水天子更よ一管を貸し又且つ弾丸と
装せる雙響銃を先導の土人子持多しめ高き竹
林の間に入り多り○因に小此子好猫の容子告
此般の泥濘を行走せむよハ極めて好き防水皮
靴を穿つと要し片若し否さ進む当子兩脚皮子
水埴を採集して家子帰るなるへし○更子行く
こと教里よして一條の徑路子去多り此路は胡

椒園子至る者あり○胡椒ハ柵子傍ひし登るお
と猶本國の圓豆トインホヲシのことく其實ハ
大さ未熟ハ豌豆の如く一簇ヒトの未熟葡萄の状を
なして小なる垂枝子懸着せり其葉ハ嫩緑子し
し光輝あり形凡そ心臟の如くなり○此邊ハ土
地は石多く胡椒園となせる小阜ハ土乾燥せり
但其間地なる身地ハ仍濕潤子して大氣重く且
つ湿を帯ひ多り

更子行くふと若手ありて「カムヒール」と名づく
る黄褐色又ひ黄色の漆料を製せる地子到近り

此物ハ一種の蔓草より成るなり○又蔓
莖樹を培植せる處ありたり樹尚不方かく
く錫葉鳥より見ゆるよりハ過り及まらん○此樹
の美なる深緑色の葉有る其間子鮮黄色の實を
多く結へむ善く長せる者ハ美觀を呈する者な
り○其實好て熟するときは自採採り果肉子紅
色の網波と被る黒核を現るあり○已に斯く
熟する時ハ核を網皮より剥き取り塩水にて洗
ひ徐に陰乾す其網皮の乾るせる者ハ肉蔓莖膜
「ウリ」^{ウリ}と稱して莖中^{ウリ}最美の品あり其外皮

も亦糖藏して食料となす按て信掌糖藏の蔓莖を
試官其より得て
ミハハ醜蕨なる磁壺の甚多外皮を全し
り膜及ハ核を合つて味最苦異なり○此
蓋新嘉坡の産する者ハ未だ知るへり
蔓莖園子ハ支那人ありて工作せしむ彼の鈍
なる天賦の人種も此地の氣候不佳なるより堪
へざる見えて多くハ羸瘦して醜形なり或ハ
瘍癩を主せる者ありり蓋し曩に海岸の村に
しむ亦此般の人を見たり此地を見たる一人も
鼻及び頭の一部瘍の爲に蝕了せらるる者あり
き○其家居ハ皆木柵にて圍繞せり○此地の道

傍に虎阱ありとて予に指示せる處ありり深
さ十五尺許方十二尺許なる穴ありて細枝を以
て其上を蓋ひ餅を置いて一塊の肉を其上に置き
あり○此支那人の礼節なく友敬あまき人種より
多くハ鴉片烟を喫し半酔して彼此の隅角を
臥し多き○余水飲乞ひしハ據あぐりて吞
の水を與ふ滿刺加人の善く人を受けるとハ反
せりコリスハ實ハ土人我等木子禁みざる所ハ能ハ
さ更む自ら採得さるへりと謂ひ請へると許さ
る余多くの曲折を心を用ひす我ヒりハ銃を以

て枝より五六顆を打落しあり心合せさる支那
人先づ一斤の銀錢を與へて惡行を謝して去
る我價ふ後其実をコリス舟中に携へ歸り晚
に向く深霧を掩ひり色も我門懼きて速に成る
り川に降る其故ハ余好く席皮をも貯へ持たれ
ともなほ「錫葉鳥子行ハ子
熟病の名」
嬰らんあつて懼る心猶甚しり途もなり途中
よて余コリスの鳥を射取りありその内ハハ文
新ある毛羽の野鴿あり
我門徐々舟を下中へ送余り心猶常に月光

乗して野猪を蹴跡せんと思へどもあり然きとも
今次亦志を得られ快くあり陸地より風吹起り
くもつーロセアカと云へる一小島は白く帆
此島より一椀を下え生硬の晩飯を食し席簷帆席
の下より休歇す

我々楫手の一人は此島は生きある者にて余は
向く此島は野猪極るらと話をしる因に朝
日ハ光十分は明あつて見く直に陸路は趣き
十分蹤跡を見たり然きとも歎を得られ終り及
く百五十足許余り居る所を離れて一頭の猪泥

中へ轉倒するを見出し多り余緩々歎き近き
行し歎はふと我認得し害心ありと思ひ芋萩
の中へ遁せ入りぬの後ハ野猪に出遇ふあり
を得る然きとも幸よ「ケルテ」フー「ンテル」野猪
を射るを得たり此島ハ甚く我國の「キム」ヘン「雞
子」似あり
余村へ返すむ楫手等味美なる雞羹を料理せ其
汁ハ肉豆蔻印度の胡椒「ケル」レイ等の椒料を
用ふ也也巴理斯の庖人の傳えあるなるへし又
好糲米佳好加藤芳香なる「カ」コ「ウ」製「カ」カ「ル」
煙「カ」カ「ル」

とも得たり然共余ハ舟中にて今次ハ此食膳
と喫せり小屋の内ハ清楚なる席を地上に敷き
より處にて食す此席上ハ諸種の蚊帳を相應
せる大きな土硯見は盛り更子集めてある成大
銅盤の上置く大凡十二トイハ許の高さの榻
八人の坐する子供余り食す對する間土人ハ
楫讓をなうり別室に遠ざかり折々席帷を褰け
し同へり此地より婦人を見は但甚老なる婦
人六歳許の一児あるのみ
余取得したる諸鳥を其皮を剥き収む此時我々フ

レカトよ返るへき限りの時刻なり余り船ハ道
と新嘉坡の群島の他部の間を取り途中にて尚
二三の鴨并に教種の海燕を射取り此諸島ハ
皆能く肥なり又鷺種も善く肥胖なり是鳥を
主なりし船上に連環送り
二十九日更子船を進め其日の午後新嘉坡岬を
出支那海に入る四五日の後ハ余ハ一ノマルセ、
レキ天國の洋岸に詣り觀むと希し望めり
香港第四月八日
一時を過ぎ支那海に入る一百三十六日を過

と後我々の計畫せる事の本意を施設せる最初
の地は恙なく来り今より前の二日の間ハゴへ
ル、イスラントとく盗島の美なる一群島を帆走
ル此群島は多く海賊窟宅せし故を以てあの
名あり此賊南西海面を動乱す又此島よりハ更
ト東の方子ヲトロ子シ又「ナ」ヘン、エイラント
にて是も盗島の美なる一群島あり上よ云へる
者ハ自ら別あり混称中へあらハ既ハ此島
と歷し今ハ支那群島の内よへ来り其奇絶画幅
の如き風景余々思想せし所ヲ超るおと甚多し

平塌せる凡庸島嶼は代へて「カラニート石の島
礁瑰奇の状を呈し重密煙を帯ぶる大気曉昏其
風景を变化幻出を支那の語意にて千五百名つ
くる大小の「ヨシケ」船唐目力の達する限り海面
を蔽ひ多し其船ハ一半ハ海岸を航濟し一半ハ
漁舟たり五時地嘴を繞る其後面ハ香港あり
霎時の後「ゴ」モトト彼屋を併合衆國のニ隻
船「リ」モウト「名」サ「トカ」名より「カ」シ砲ま
其来着を祝しけし北砲声と共に我船の砲も
も通し答へて此鳴を答へる頃刻にして我々

の状箱を船中へ送り来る本国より書翰到来せ
る人々の叔父は余れのみり衆人甚多始に羨け
せも亦世致讀人として人遠き處に到る其書翰を
得さる人々ハ口々に喃々としてつぶやきなりや
聊水子鑑に或ハ已送り失意に申し人を墜倒
する語々々^ニ地却ヨウル^ハのエイエス^ニと放言
しける

...

